

## 【中学校の部】 優秀賞

### 魚が教えてくれる ふるさとの四季

白杵市立南中学校 2年

玉田 泰一



僕は、物心ついた時から祖父の影響で釣りを始めた。今では、一日、いや一時間でも釣りができないと落ち着かなくなるほどだ。たくさん釣れた時には、魚をさばいて、近所の人におすそ分けするのだが、とても喜んでもらえる。また、周囲の大人には「釣りをしている時には、目が生き生きしている」と言われる。このように、釣りは僕にとって人とのつながりであり、生きがいでもある。

そんな大好きな釣りを通して、僕はこの白杵の豊かな自然を実感する。春夏秋冬、いろいろな魚たちが姿を現してくれる。

春と言えば、メバル。九州では、メバルを「春告魚」と呼ぶ。春が訪れるとメバルは産卵のために浅瀬に移動してくる。白杵出身の吉丸一昌が作詞した「早春賦」に「春は名のみ 風の寒さや」とあるように、まさにまだ春とは程遠く感じる肌寒い時期だが、夜の海にはメバルの子どもたちがたくさん泳ぎ始める。海の中の魚たちには、陸上では感じられない春の訪れが分かっているのだと思うとおもしろい。

続いて姿を見せるのは、ヨウジウオだ。この魚が登場すると、夏が近付いていることを感じる。普段は石の下に隠れているのに、日光に照らされて藻が生い茂ってくると、酸素を求めて水面近くに姿を現すのだ。

梅雨時期には、ナマズが田んぼの水路に上がってくる。大雨で水面が濁った水路は、安全に卵を産むのうってつけた。普段は海や川で釣りを楽しむ僕だが、水路でのナマズ釣りもなかなかおもしろい。

夏も本番になると、ヒラアジやコチが釣れ始める。どちらも釣るのも楽しく、味もおいしいので、僕は夏が一番好きだ。海の色が、春の青からだんだんと緑に変化していくのも夏の訪れを実感してワクワクする。また、この時期は日が長いので、一日中釣りを楽しむことができる。朝日に照らされてキラキラとした海面、もくもくと湧き上がる入道

雲、大きな夕日…こうした景色の変化に気付くことができるのも、釣りの楽しさの一つだ。

続いてやってくるのはカマス。白杵で獲れるカマスにはアカカマス、アオカマス、ヤマトカマスの三種類あるが、秋は特にアカカマスがよく釣れる。カマスは他の魚に比べると急に湾内に入ってくるので、「秋が来た!」と直感で分かる。紅葉が色づくように秋も深まってくると、湾内だけでなくろんなところでカマスの姿が見られるようになる。

クーラーボックスの中の氷が溶けにくくなってくると、冬を感じる。冬と言えば、ブリだ。出世魚の最終形態でもあるブリは、大きなものでは1mほどとなる。釣り上げるのに時間も体力もかかるが、それでも何度も勝負したくなる魚だ。冬は寒さ対策のために装備が重くなり苦しい季節だが、釣りをしている時だけは、その寒さも忘れて集中してしまう。暗くなるのが早いので、釣り足りないと感じるほどだ。

こんなふうに、釣りを通して四季の移り変わりを感ずることができるのも、身近な場所に豊かな自然があるおかげだ。しかし、ここ数年、海や川、そしてそこに住む魚たちの変化を感じている。秋の訪れを教えてくれるカマスが、去年はやってくるのが遅かった。メバルと並ぶ春の代表的な魚であるクロダイの数は年々減っているし、反対に温かい海域を好むエイは増えている。そのせいで、もともと生息していた魚たちのエサが奪われている。たくさんのゴミが海岸に流れついて、ゴミだまりができています。どれも人間が自分勝手に便利な生活を追求してきた影響だ。

自然豊かな環境は、当たり前ではない。釣りに行った時には、自分が出したゴミを持ち帰ることはもちろん、すでにあつたゴミを拾ってきれいな状態にして帰る。そんな小さな取組を通して、この恵まれた環境に感謝の気持ちを伝え、守り続けたい。大好きな釣りがこれからもずっとできるように。